

山頂のメリーゴーランド

放射朗

僕らの目の前には、光り輝く赤や黄色の色とりどりのランプに飾られた、メリーゴーランドが華やかな音楽とともに回転していた。山上の透き通った冷たい空気の中、その光景はとてもこの世の物とは思えなかった。

回転木馬は波に揺れる浮き輪のようにゆっくり上がり下がりしながら滑るようにまわっている。

僕らを誘うように……。僕らに笑いかけるように……。

たぶん住所としては中津江村と上津江村の間あたりになるはずだ。

何の住所かというと、今向かつてる神社の所在地のことだ。

深海に沈んで朽ち果てた船のように僕の横で亜由美は軽い寝息を立てているが、疲れたのはわかるし、起こしても話すことは特に無いから僕は彼女をそのままにしておいた。彼女に聞いても僕以上にはっきり憶えてると思えない。

亜由美の微かな寝息を聞きながら、僕は谷沿いの山道をライトを上向にしたまま車を走らせている。対向車は全くこなかった。

深い谷底の道だから、日が暮れてしまえば周囲はたちまち闇の中に

なり、車の照らすライトの他は何もない虚空の宇宙だった。

本当はもっと早い時間に目的地にたどりつく筈だったのだが、それがこの時間になったのは、高速道路の事故渋滞が原因だ。もつとも、福岡を出てくる時間午後後の三時を過ぎていたからさほど余計に時間がかかったというわけではないが。

でも、そのおかげで初めてその神社に行った時と、道のり的にも、時間的にも近くなっていた。

亜由美とは出会って三年が過ぎ、燃え上がるような恋もすでに下火になり、今は鎮火寸前になっている。亜由美は恋愛イコール結婚という考えで、まだ二十二才にしかないのに、僕にずっとプレッシャーをかけてくれていた。

僕の方はというと、二十五才という若さで身を固めてしまうのはちょっと考えたくないし、もうしばらく一人でいたいと思っている。

亜由美には特に不満も無い、というより僕にとっては最高の相手かもしれない。ただ、付き合いが長くなるにつれ、欠点の無いのが気詰まりになり出した。

学歴的にも僕より彼女は上だったから、彼女の知らない事を教えてやる楽しみも無かったし、むしろ僕はコンプレックスを感じるくらいだった。

最初の頃は何とか学力でも同等の物を身につけたいと、埃をかぶった数学の参考書などを取り出してきて勉強してみたりしたけど、すでに社会人になって何年もたつてるのだ。現役時代でもわからなかったことが、記憶力の弱くなった今理解できるわけが無かった。

もちろん彼女はそんな事にしないし、鼻にかけるなんて全然なかったことだけど、たまに僕の得意分野（たとえばパソコンとか）で僕から教えられたりすると、露骨に機嫌が悪くなるのだった。僕なんか

に教えてもらうのはプライドが許さないみたい感じた。

そんなわけで、僕たちというか、僕の気持ちは最初の炎が静まってくるに従ってどんどん冷たく冷めていき、それとともに二人の会話も話がすれ違いぎみになり、そしてとうとう修復不可能な場所まで来てしまったのだ。

たぶん今回が二人で行く最後のドライブになるはずだ。

福岡から高速道路を鳥栖まで走り、そこから大分自動車道路に入る。本当ならこの高速を日田まで走ってそこから国道二十二号線を南下するのが一番早いのだが、運悪く事故渋滞が発生していたのでその手前の杷木でおりて、浮羽町に入り、星野村経由で矢部村に入った。矢部村から谷沿いの国道四百四十二号線を東に走って三十分ほど行ったところが中津江村だ。

今日のドライブはあらかじめ予定していたものではない。別れ話をするために今日二人で会って、僕はそのままサヨナラするつもりだった。最初は別れたくないと言っていたが、僕のコンプレックスの話とか、僕の中で亜由美への愛情が消えつつあることを冷静に話してやると、案外亜由美も落ち着いて受け止めてくれた。

でも、亜由美は思い出してしまった。

二年前の初夏に行ったドライブのことだった。まだ恋愛真っ最中の二人は道に迷うのも楽しくてたまらない状態で、彼女は地図を眺めながら僕に変なナビゲーシオンをして笑い転げていた。すっごい山奥だね。このままムーミン谷に続いているみたい。あそこの人、麦藁帽子なんかかぶって、振り返ったらスナフキンだったりして……。

まだ夕暮れには間があったからそんなことを言っただけの余裕もあつた。

そっちは違うだろ、この車は水陸両用でもなければ、プロペラがついてるわけでもないんだから、そんな言葉を返したのを微かに憶えている。

二年前のその日は、南小国のしゃれたペンションに二人で泊まって熱い夜を過ごすつもりだった。結局は午後九時前に何とかたどり着けたのだけど、そこに行くまでにさんざん迷って変な神社に迷い込んだのだ。

今考えたら、あまり気持ちのいい神社じゃなかったし、道を尋ねるといふ目的があつたにしても二人で中まで入っていったのは、めくるめくような激しい恋愛感情のなせる技だったと思う。あの時の二人には怖いものは何も無かつたのだ。

現実世界にも、そうでない世界にも、二人の敵はいなかつたし、いても簡単に撃破できると二人とも信じていた。

古びた鳥居の前に車を止めて、境内に入っていくが、社務所には誰もいない。僕は左手に亜由美のやわらかい掌を感じながら、先を歩くようにして薄暗い境内を進んだ。

境内にはいくつか灯があつて、頼りないながらも足元は何とか見えていた。

その時僕が何を考えていたかというと、実は道を探ねるなんてどうでもいいのだった。人気のない神社の境内で彼女の下着を膝まで下ろしてやろうかなんて思っていたのだ。若い二人だから愛しあつのに一々場所柄をわきまえなかつたとしても、神様も許してくれるはずだ、なんて考えていた。

だから僕にとつてはその神社に誰も居なくても残念ではなかつたし、僕だけじゃなくて彼女さえ似たような感情を持っているのが、その息の匂いや掌の汗で窺い知ることができた。

お賽銭入れが置いてある所まで来た。奥は明かりがともされているが、人の気配はなかった。

僕はその暗がりの中で、後ろから彼女を抱きしめた。

亜由美も振り向いて僕の唇を待っている。

僕が首を曲げると二人の唇は接触し、熱い舌が合わさりあう。僕の両手が、亜由美の腰から上に上がり、その胸の豊かな、少し硬いふくらみを下から揉み上げる。

くぐもった声が上がリ、亜由美はさらに僕に体を預けてきた。

舌の絡まるのと同じように二人の熱い魂がきつく結び合い、周囲の物を焦がしかねないくらいに熱い波動を撒き散らす。

その熱い緊張は、僕が日ごろの運動不足のせいか彼女の体重を支えきれなくなり、うっかり身体が揺れて、鐘の紐によるけかかるまで続いた。

ジャラジャラという音がやけに大きく響いて、僕も亜由美も、驚きに思わずお互いの顔を離れた。そしてふと見ると、賽銭箱の奥の障子が開いており、そこに一人の老婆が座っているのが見えた。

小さく悲鳴をあげる亜由美。僕はついすいませんと謝ってしまった。

「いやいや、久しぶりにいいものを見せてもらいました。愛しあう男女は何にもましてこの世で最も尊い物ですから」

その老婆は白い巫女の装束を着ている。この神社の関係者に違いない。

「あの、実は道に迷ってしまって……、南小国の方に行きたかったんですが、どこでどう間違ったのか、山の上まで来てしまったんです」
「気を取り直して僕は老婆に言ってみました。冷や汗かいたのか、背中が急に冷たくなっていた。」

「まあまあ、そう恐縮せずに、道は教えてあげますから、こちらに上

がって来られると良からう。いい物を見せてもらったお返しに、お札を呈しましょう」

微笑む年老いた巫女に促されて、僕と亜由美はその中に入っていた。

靴を脱いで、鉄のようにひんやりとした板の間を少し歩いて、ご本尊の前まで来た。蝋燭の灯りが風に揺れて僕らの影をふわふわ揺らせている。橙色の光があたり一面に充滿して、僕の頭の中にまでぼんやりとした浮遊感を感じさせる。

「この札は良い子が授かる札じゃ。健康な赤ちゃんが生まれ、健康に育つ。お二人のいい面だけを受け継いだ最高に良い子が生まれるじゃろう」

ご本尊の傍からはがきを縦に二つに折りたたんだ位の大きさの札を老婆は取り出し、正座する僕らの前に差し出した。

小さな文字が書き記されたその白い札は、持ってみると結構分厚く重かった。

亜由美の方を見ると、僕の手の中のその札を熱心な眼で見つめていた。

「でも、もし僕らが別れる事になったらどうなるんですか」

僕がそんな事を聞いたのは、その時点で二人が別れる事など金輪際起こりえないと思っていたからに違いない。少しでもその可能性にリアリティがあったとしたら、僕は黙っていたはずだ。縁起でもないことは一切口にしなかったらと思う。

「あなた方がここにこられた事は、あなた方が最高の組み合わせだったという事じゃが、確かにそれでもどちらかのわがままか、周囲の理解不足で別れざるをなくなる事があるうな。残念な事じゃが、その時はまたこの札を持ってここに来なされ。この神社に来れるかどうか

わからんが、その札を持つてる限り何かがあなた方を迎えるじゃろう。その札はその者に渡されるがよからう」

「もし、札を持つて来れなかつたらどうなるんですか」
今度は亜由美が聞いた。

「あなた方二人とも、子供を持つことができなくなるじゃろうな。最高の子供を持てるか、そうでなければ全くもてないかじゃ」

「あたしは二人の赤ちゃんがほしいと思つてます。最高の子供が」
亜由美の気持ちのこもつた言葉に、老婆はうんうんと頷いた。

「それならなんも問題は無い」
そのあと老婆に道を聞いて僕らは何の問題もなく南小国まで下つていった。

かなり下り道が続いたから、来る時は気付かなかつたが、知らないうちに相当高い所まで上つていたのだらう。

その時の事を亜由美が思い出したために、今日は僕らはこの札を返すために再び山奥の神社を目指す事になつたのだ。

多分この辺りという所までたどり着いてはみたものの、僕はなかなかその上り口を見つけないでいた。あの神社は山の天辺付近にあった。この谷沿いの道から山頂に上る道があるはずなのだ。

何度か同じ場所を行きつ戻りつしてみても、さっぱり手がかりが見つからない。

周囲は闇の中に沈んだまま、谷川のせせらぎだけがいつも耳に響いてくる。

亜由美を起こして尋ねてみるしかなさそうだ。

僕が亜由美を揺り起こそうと車を路肩に止めた時、亜由美は自分から目を覚ました。最初はぼうつとしていたが、僕が道に迷つてる事を説明すると、軽く首をふつて、そして頷いた。

「変な夢を見ていたの。ここはどの辺り？」

中津江村から上津江村にはいる所だよ、僕がそう答えると、じゃあもう一度中津江村に入つて、それからユーターンしてみて。と答える。

亜由美は僕が言われたとおりにしてる間に、なにやらバッグを開けて取り出していた。それはあのお札だった。

亜由美に言われた場所まで戻り、再びユーターンして引き返すと、それまで全く気付かなかつた細い道路が右側の山の上に見えるのが見えてきた。

僕は彼女に言われるまでもなくそちらにハンドルを切る。

2年前に上つた道だった。車一台がやつと通れるだけの狭い道路。両脇から木の枝が垂れ下がり、前方以外の視界は全くゼロだ。

少しずつ高度を上げて谷間から登つて来ると、徐々に見晴らしが良くなって、周囲の林が途切れた隙間から青白い半月が冷たい光を放つてるのが見え出した。

そしてすぐに僕らを包んでいた杉の林はなくなり、道の周囲は低い雑草の生い茂る緩やかな山道に変わる。

天空の星々が降つてきそうなくらいにたくさん光り、天の川銀河が無数の宝石をばらばらと縦に長く散らばらせている。そのきらめきは空気が動いた時に瞬き、生きてるように見えた。

でも、こんな場所だったかな。以前来た時は森の中に沈み込んだ古い神社という感じだったけど……。

確かに山頂近い場所だったが、こんなに天辺じゃなかつたと思う。でも山は不変じゃない。杉の木は伐採されてしまったのだらう。

自分の中でそんな風に言い訳するのはなぜだらうか。

亜由美はあれから黙つたままだ。何を考へてるのか、じつと前方を凝視している。

あの老婆の台詞がおかしかったのは、僕もあの時に気付いていた。

この神社に来たのはあなた方が最高の組み合わせだったからと行っていた。

そうじゃ無いなら来なかったという事か？

あの時の僕が深く考えていなかったのは、別に何の理由もない。そんな不思議な神社などあるわけが無いと思っただからだ。

でも今日は、入り口がなかなか見つからなかった事で、あの神社とあの老婆が通常の、僕らにとって常識に彩られた事象とは違うのではないかと僕は思い始めたのだ。

なかなか見つからなかった入り口が、亜由美の言うとおりにしたら簡単に見つかって、そして彼女の手にはあのお札が握られている。

この場所が現実ではない不可思議な場所ではないかと、僕が疑う理由には事欠かないというわけだ。

「あたし達やつぱり結ばれるべきだったんだよ。あたしはいつも結婚しようと言ったのに、孝志が悪いんだよ」

それまで黙っていた亜由美がそう言ったのは、道の先に光り輝く場所が出現した時だった。僕は神社とは似ても似つかないそれが現れた事にあっけにとられていたのに、亜由美は当然のことでも言うように無表情にその光を見つめていた。

「何なんだあれは。亜由美、何か知ってるのか？」

僕は門の前で車を止めると、助手席の亜由美の方を見た。

「夢の中で出てきたのよ。ここに来る方法も、ここにある物も。孝志が知らされなかったのは、きつと孝志の方が悪いからだよ」

悪い？別れる事になったことか？確かに僕の方のわがままが原因って言われればそうかもしれないけど。

「どうしてメリーゴーランドなんだろう。あの時は神社だったのに」
僕は車から降りながらつぶやいた。

「行ってみればわかるわよ」

亜由美も神社がメリーゴーランドに変わったわけまでは知らされていないようだ。

歩いていくと、入場口が見えてきた。そしてそこには2年前の老婆がいるのかと覚悟していたら、そこにいたのは女性ではあるが、若くてきれいなバニーガールの格好をした女の子だった。

「こんばんは。券を見せてください」

すらりとした長い足を惜しげもなく冷やかな空気の中にさらけ出した彼女は、僕たちを見つけるとそう言うのにこりと笑った。

「ここは何なんですか」

お札を渡そうとする亜由美を制して、バニーガールに僕は訊いた。

「何って聞かれても困ります。あなたの理解できる言葉では説明できませんから。数式でなら説明できるけど、ノーベル物理学賞でももらった人でないとちんぷんかんぷんでしょうね。あえて言葉で言えば、在りそうで無い場所。無さそうで在る場所、という所でしょうか」

「じゃあ君はいつたい何者なんだ」

「それはあなたたちには関係ないことです。私が誰であっても、あなたたちにとってのこの場所は変わりないんですから」

僕が何も言えなくなると、亜由美が横からバニーガールにお札を渡した。

「彼女は少しはわかっているみたいですね。後は彼女と話し合ってください」

バニーガールが何かを操作すると、目の前の柵がゆっくり開き、僕は中に入ることができた。

回転木馬に二人でゆっくり近づいていく。ここで何をどうすればいいんだ？

これに乗れということだろうか。でも、それが何になるんだろう。近づくとつれ、上下しながら回ってる木馬が、ただの木馬じゃない

のがわかった。

あめ色の胴体は普通の馬じゃないのだ。鞍の部分が尖った三角形の木材でできた三角木馬だった。良くSMプレイの場面に出てくる昔からある拷問の道具だ。

またがる者の股間をきつく圧迫し、強烈な苦痛を与えるのだ。

その三角木馬に、同じ色の首と頭がつながり、足もきれいな脚線美の馬の脚がついていた。

「これはいったい何のつもりだろう」

予想外の趣向にあきれてものが言えない僕が、やっとそれだけしほり出した。

「最高のカップルが別れる事は神に対する反乱だととられたのかもしれないね。それならその場所を破壊してやる、なんてね」

僕より少しこの状況を理解してるらしい亜由美が服を脱ぎだした。

「何のつもりだ」

「あれに跨る時はやっぱり裸にならないといけないでしょう」

「乗るつもりなのか？」

「そうしろという事よ。ほかにしようが無いのよ」

「馬鹿馬鹿しい、こんなふざけた事に付き合つてられないよ、帰ろつ」

僕は亜由美の手首を握ると、来た道を引き返す。

亜由美も別に抵抗せずに素直についてきた。

バニーガールのいた入り口はそこには無かった。右も左も鉄柵が延々と続いてるだけだった。柵を見上げると、金色に光るその柵は夜空のかなたまで続いている。

そしてその空に誇らしげに満月が輝いていた。

変だ。来る時に見たのは半月だった。それなのに今は満月になっている。常軌を逸した世界という言葉が、僕の心に浮かび上がってきた。

「あなたが私を愛さなくなった理由をもう一度考えてみて」

ふと見ると亜由美は全裸になっていた。そして僕も。

草原の上で遠くにメリーゴーランドを眺めながら、全裸の二人が立ちずくんでいた。

「愛する理由もわからないのに、愛さない理由なんかわかるもんか」

僕の怒声は乾いたスポンジに吸い取られる水滴みたいに夜空に吸い込まれて消えていく。それを感じるとなんだか興奮が冷めて、不思議と冷静になってきた。

「多分君が出来過ぎてたんだよ。容姿端麗で学力も僕より上で、簡単に言えば、高卒の保険会社の営業マンと、医学生とではつりあわないつて事さ。僕はいつも君と同等の会話ができるように難しい本を買ってたけど、それにも飽き飽きしたんだ。所詮君にはかなわないから」

「別に学力なんか関係ないじゃない。人間の価値は頭だけで決まる物じゃないわ」

「その言葉は偽善だよ。現実的じゃない。僕らが最高のカップルだなんてとんだお笑い草だ」

亜由美の顔から僕は目をそらし、満月を見やった。

「現実的でないのは認めるけど、偽善とは限らないと思うわ。それに私達が最高の組み合わせじゃないというのよね。私にとってはあなたの素直な優しさと、健康な体が最も必要なかもしれない。

そうよ、あのおばあさんが言ったのはそう言うことだったのよ」

「君の優秀な頭脳と、僕の健康な体が合わるのが一番いいところとか、冗談じゃない、僕は健康だけが取り得のロボットじゃないぞ。頭だつてそんなに悪くは無いんだ」

満月がぼやけて見えてきた。

「僕は君と付き合うことが嬉しくてたまらなくて、そして辛くてたまらなかつた。君は僕なんかの恋人に収まるような人ではないといつも

感じていたんだ。いつか壊れるべきなんだとね」

「だから私に愛想をつかさされる前に、嫌いになろうと努力していたわけね。全く、馬鹿なんだから」

彼女の言葉はこれまでの僕にとつてはサバイバルナイフよりもきつい武器になって僕の心を刻んだだろう。

でも、今はなぜだかすがすがしい言葉に感じた。

亜由美は泣きじゃくる僕の頭を抱えて、胸に抱き寄せてくれた。

僕は膝を曲げてそのふくよかな胸に頬をよせた。

「行きましよう。あなたは快樂が苦痛に変わってしまったのよ。あれに乗ればその反対になれるはずだわ」

「苦痛の反対の快樂に導く回転三角木馬か……」

涙でにじんだ回転木馬は虹が渦を巻いて宇宙を吸い込んでいるように見えた。

僕らは手をつないでその渦に向かって歩いた。

目の前を回っている奇怪な三角木馬。

亜由美は僕の前で一段上がる。亜由美の形のいいお尻が僕の目の前で揺れる。

「じゃあいくよ。すぐについて来てね」

もう一段登ると、回転木馬の台座と一緒にあって亜由美の体が僕の前から遠ざかる。僕も一段登ろうとしたけど、どうしたわけか足が出なかった。

そうするうちに木馬にまたがった亜由美の背中がどんどん遠ざかる。振り向いて何か叫んでるようだが、それほど離れてもいないのに声は全然聞こえなかった。

焦る気持ちが湧いてくるが、考えてみるとこれは円を描いてるんだ。少し待てば亜由美は戻ってくるだろう。

いくつもの木馬がやってきては遠ざかっていく。このメリーゴーランドの直径から考えて、優に何週もしてるはずなのに、亜由美の姿は現れない。

僕は取り返しのつかないことをしてしまったんじゃないだろうか。

二度と亜由美に会えなくなるかもしれない。心臓が高鳴って震える膝で僕はその台の上に乗った。

氷のように冷たい台座の上ののり、木馬をつかむと、それが低くなつた時に思い切つてまたがってみた。

股間の一点に体重がかかり、木馬が上昇するとたんに激痛が僕を襲つた。

こんな夢のような世界の事だというのに、激痛は本物だった。

激痛は時間とともにしびれに変貌する。痺れはやがて下半身を麻痺させ、僕の間を無に引き裂いていく。

快樂に変わるのはいつの事だろうか。

白い霧のかかる僕の頭の中で、全裸の亜由美が微笑み、そして両手を差し出して早くこっちに來なさいと大声で何度も呼んでいた。

山頂のメリーゴーランド

おわり

